■日本燃焼学会創立50周年記念特集■

学会誌の変遷（「燃焼研究」）

岡山県立大学情報工学部情報システム工学科　福谷　征史郎

「燃焼研究」の編集部は，神野博先生が編集担当になられた1979年5月発行の第50号から京都大学工学部工業化学教室に移ってきた．それ以来，編集部が岡山県立大学情報工学部に移った期間を含めて，第115号で大阪府立大学工学部に移るまでの間，間接，直接に「燃焼研究」の編集に関与してきたことになる．以下，大いに主観的な話になっていくことを承知の上で，「燃焼研究」の変遷をたどり，さらにその周辺のことにも触れていきたいと思う．

最初は表紙の色や，タイプ謄写印刷など体裁は従来のものと変化はなかったものの，編集後記にも書いておられるように，神野先生が編集方針として打ち出されたのは，毎号できるだけテーマを絞った特集号とするということであった．編集委員会という組織をまだもっていなかった「燃焼研究」にとって，この特集テーマを決定するということはなかなか大変な仕事であったようで，自ら関係分野を探すとともに，近しい方々とも相談しながら，いろいろと思案した上で決めておられたように思う．しかし，いまあらためて「燃焼研究」を読み返してみると，必ずしもはっきりしたテーマが掲げられていない場合やテーマそのものに「？」をつけざるを得ない場合もあって，その当時の先生の気苦労が偲ばれる．もう一つの内容上の変化は，「燃焼研究」が会員にとって役に立つ情報媒体であるべきだという考えから，講演討論会や見学会の案内や結果報告をできるだけ詳細に載せるようにされたことで，ほとんど毎号の巻末の数ページのスペースがこのために割かれている．これは後に案内の部分と報告の部分とが分離され，前者は会費の納入依頼などとともに会告としてカラーページになり，さらに第65号からは巻頭に移ってきた．

私は，最初のうちは学生と一緒に校正や発送などの業務にもっぱら携わっていたが，神野先生が多忙になってこられたこともあって，徐々に受け持つ領域が拡大していった．最初の頃の大きな仕事は，第68号に掲載された「燃焼研究」の第1号から第67号までの総目次の作成であった．功刀先生や神野先生がもっておられた「燃焼研究」を机の上に積み上げ，何日間か格闘したことを思い出す．

この年に神野先生が日本燃焼研究会の第5代会長に就任された．先生が会長になられてまずされたことは，数百人の構成員からなる団体としての形を整えることであった．その意味からも，燃焼研究会の前年度の事業報告と経理報告を作成し，次年度の事業計画，予算とともに承認してもらうことになった．これらのことは直接には「燃焼研究」の編集に関係はなかったけれども，先生のそれらの新しい提案にともなうてんやわんやぶりを紹介させていただく．このうち周囲のものにとって最も大きな精神的負担になったのは，経理報告，特に，収支決算書，貸借対照表などの財務表の作成であった．あらかじめ財務管理について調べておられた先生から説明を受けたのではあるが，これらの表を作成するためには，まず，その基本となる燃焼研究会の年度始めの維持会員数，個人会員数に基づいてその年度に入ってくるべき会費を収入として計上し，さらに決算時点で納入済みの会費と，未納入の会費が把握できていなければならない．ところが会費納入方法一つを取り上げてみても，郵便振替，銀行口座振込，現金書留などがあり，しかも納入された会費が必ずしも当該年度のものとは限らず，さらに，年度途中の入退会会員など，それらを間違いなく処理していくことはかなり大変なことであった．神野先生は，われわれの苦労を横目で見ながら，すべての財務表の結果は矛盾なく合うはずだといわれるのが常であった．先生がいわれることに誤りがないことは十分承知はしていたけれども，決算時期が近づくと，毎年度始めの「燃焼研究」に掲載していた数種類の財務表が完成するまでの間は，神野先生の秘書をしておられた女性と私は，精神的にかなり消耗してしまうという事態になるのが年中行事となった．

経理上の問題もあって，この時期からデータベースを用いて会員管理をおこなうことになった．そしてそれと同時に新たに加わった仕事が，毎年会員名簿を発行して「燃焼研究」とともに送付することと，各会員に会費納入状況を知らせるための記号を会員一人一人に対して「燃焼研究」を送付するときの宛名ラベルに刷り込むことであった．これらについてはいずれも，処理ソフトを組み上げてしまうまでに苦労をした．

「燃焼研究」の編集に話を戻すと，1987年4月発行の第74号から，それまで長く続いていた表紙の体裁が変わり，裏表紙に英文目次がつけられるようになった．また，本文は2段組になり，かなり読みやすくなったと思うが，印刷はまだ大部分が従来のタイプ印刷のままであった．

1991年4月に日本燃焼研究会は日本燃焼学会に名称変更された．「燃焼研究」編集については，1993年になって，廣安博之委員長以下5名の編集委員からなる「燃焼研究」

編集委員会が設立され，各号の企画，編集，発行のすべての業務がこの編集委員会に引き継がれた．当時の日本燃焼学会平野敏右会長の意向もあって，発行は 1 月，4 月，7 月，10 月の年 4 回となり，会員から広く投稿原稿を募集することになった．1993 年 4 月発行の「燃焼研究」第 92 号の巻末には投稿規定が記載されている．その規定によると，原稿の種類としては，研究論文，総説 (レビュー)，解説，資料，その他 (論説，随想など) となっており，それぞれについて規定ページ数や原稿執筆要領が決められている．この段階で「燃焼研究」にも原著論文を投稿することが可能になったわけである．さらに，表紙には燃焼に関するカラー写真が掲載されることになり，第 92 号を境にして「燃焼研究」は内容的にも外観的にも面目を一新し，学会誌として将来の方向に向かって一歩を踏み出したといってもよい．その後，編集委員会は年 2 回程度の頻度で開かれ，大学および企業からの 5 ～ 6 名の編集委員が，毎回その先何号か分のテーマを，基礎的研究，応用技術，タイムリーな話題など多方面にわたって検討し，各号の担当編集委員を決めていった．さらに依頼原稿については著者を推薦し，担当編集委員が依頼するという形をとった．たとえば，第 100 号からシリーズとして始まった研究所紹介では，最初は国内の企業の研究所や研究機関，さらには国外の研究機関を含めて多数の研究所の活動が紹介されており，それぞれ燃焼研究における現状，動向を知る上で興味深い情報を与えてくれている．ちなみに 1 年間にわたって表紙を飾ることになる写真は，原則的に「炎の写真展」で優秀な成績をおさめたもので，ご存じのようにいずれも「燃焼研究」の顔としてふさわしいものばかりであった．

私もこの編集委員会に加わっていて，主として原稿を受け取ってから後の過程を担当していた．各著者からの原稿が出そろった後の編集サイドの最も重要な，しかも厄介な仕事は校正である．以前から「燃焼研究」の校正は，著者に送ってやってもらうのではなく，学生にも手伝ってもらって研究室内で手分けしておこなっていた．このときに特に面倒で気を使うのは数式の部分であった．このことは原稿から印刷用の版を作るときにもまったく同様であって，複雑な数式が出てきた場合には，印刷所の人に研究室まで出向いてもらって直接指示しなければならないことも多かった．

1993 年 4 月から，私の転勤にともなって編集に対する実務的な仕事の場が岡山に移ることになってしまい，上記のような問題も含めて，印刷と発送をどこでするかという問題で，かなり深刻な事態に陥った．それまで依頼していた京都の印刷所ともいろいろ相談の結果，幸いなことに「燃焼研究」の発送は印刷所で引き受けてもらえることになり，問題の一つは解決した．残ったのは印刷原稿作成と校正の問題であった．ところがちょうどこのころ，いわゆるデスク・トップ・パブリシング (DTP) が普及してきて，私の研究室にも DTP ソフトである TEX とレーザープリンターがはいってきた．印刷の専門家から見れば，活字かプリンターの文字かは一目瞭然であるとのことであったが，その点については目をつぶり，「燃焼研究」の印刷用オフセット版作りに DTP 法を利用することによって，校正をする必要がないようにした．さらに，著者には原稿をフロッピーディスクに入れて送ってもらい，それらの原稿を直接印刷原稿に変換した．この方法によって少なくとも本文に関しては，改行，インデンテーション，句読点などについて，エディタの操作と自作した変換プログラムによって比較的簡単に形を整えることができるようになり，各原稿を共通のフォーマットに統一することも可能になった．しかし，数式については，TEX の書式にしたがってすべて入力し直す必要があり，正直言って，数式が多い原稿を手にしたときはため息をつきたい思いであった．表は複雑なものを除いて原則的に TEX で作り直した．また，図については，原図を適当な大きさになるように縮小し，本文の対応する位置に窓をあけておき，そこへ貼り付けた．各著者から送られてきた原稿だけではなく，目次，会告など表紙と裏表紙を除いたすべてのページについても同様に印刷用原稿をプリントアウトし，印刷所に送ることにした．印刷所に信頼できるスタッフがおられたこともあって，このオフセット印刷方式をとることによって，印刷所にオフセット原稿を送りだしてしまえば「燃焼研究」発行の仕事は事実上すべて終了することになり，非常に楽になった．

いま，この原稿を書くに当たって，また以前のように「燃焼研究」を机の上に積み上げて 1 冊 1 冊を手に取ってみていくと，特に原稿を目に見える形にしていく過程に携わっていたこともあって，いろいろなことが思い出される．しかし，現在発行されている「燃焼研究」と見比べてみると，現在のものはさらに大きな一歩を踏み出したことが実感できる．「燃焼研究」，そして「日本燃焼学会」のさらなる発展を祈念する次第である．